

食事後の食器が置かれた台所は生活感が残り、時が止まったかのようだった

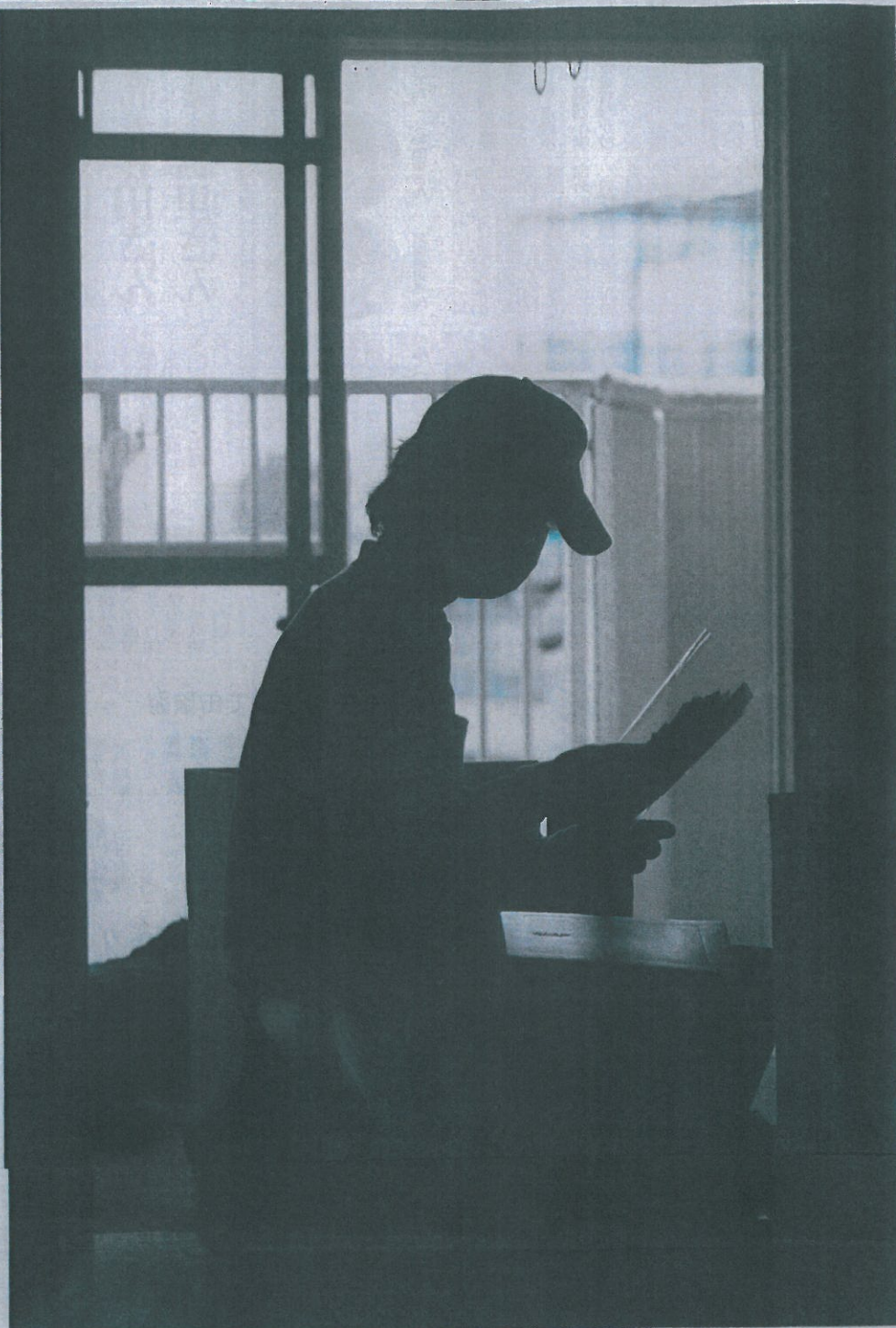


孤独死——遺品整理の現場



ちゃぶ台や食器棚が置かれた部屋には7月と8月のカレンダーが貼られたまま

段ボール箱に詰まった大箱の書類の中から、在りての面影が残る写真や手紙などを整理する。名古屋市内で10月



面影求めて

残る暮らしのぬくもり

Photo たいは

見された。室内に入ると、台所の調味料や洗い残しの食器、居間に残るたばこの吸い殻などから、暮らしのぬくもりが伝わってくる。作業は、食品や紙くすなど不要品をまとめ、約1万2000件の遺品整理を請け負ってきた同社の吉田太一社長(48)は「家族や友人との結びつきがあった人は、たまたま発見が遅れただけで孤独死とまでは言えない」と前置きしたうえで「社会から孤立する人が増えているのは事実。そうなら、近所の人のつながりが大事です。今は家族と暮らしている人も、自分のこととして考えてほしい」と訴えている。

約1万2000件の遺品整理を請け負ってきた同社の吉田太一社長(48)は「家族や友人との結びつきがあった人は、たまたま発見が遅れただけで孤独死とまでは言えない」と前置きしたうえで「社会から孤立する人が増えているのは事実。そうなら、近所の人のつながりが大事です。今は家族と暮らしている人も、自分のこととして考えてほしい」と訴えている。

孤独死の現場を見つけたのは、80代の女性が住んでいた名古屋市内の共同住宅。女性は死亡の数日後、連絡がつかないことを不審に思った親族らが発見された。遺品を納め、

独り暮らしの人が誰にも気付かれずに、孤独死が社会問題になっている。残された家具などを遺族に代わって片付ける遺品整理会社「キーパー」に同行し、孤独死の現場を見つけた。訪れたのは、80代の女性が住んでいた名古屋市内の共同住宅。女性は死亡の数日後、連絡がつかないことを不審に思った親族らが発見された。遺品を納め、

扉に置かれたたばこケースの中に数本のたばこが残されていた



室内から見つかった写真や貨幣、貴金属品などは遺族に渡される